

初回購入特典

茶道部の後輩と部活動デート
～ 梢といっしょにお家デートしませんか？～

シナリオ…汐海有真



Chapter 1

(SE: 秋風の吹く音、主人公と梢が町の中を歩く音 このChapter中継続)

⑪ 「うう、最近、随分と冷え込んできましたね」

⑪ 「まあ、それもそうですね。来月はもう十二月ですし、秋と呼べるのは今月までです」

⑪ 「梢、寒いのは得意じゃないんです……まあ、暑いのも得意じゃないんですけれど」

⑪ 「そして春は杉花粉のせいでくしゃみと鼻水が止まらなくなるので、秋は唯一まったりできる季節だというのに……むう」

⑪ 「ちなみに先輩は、どの季節が一番好きですか？」

⑪ 「……冬の、あったかいお布団？ あ、の、先輩……それは冬が好きというより、ただお布団が好きなのではないでしょうか？」

⑪ 「ふふつ、バレバレですよ。まあ確かに、梢もお布団のこ



とが大好きですけれど」

⑪「……えつ、先輩、お布団と結婚したいんですか……!？」（演技依頼…焦っている感じで）

⑪「そ、そんな、だめですっ！ な、何でだめかって……」

⑪「だって奥さんの座は、梢がずっと狙っていますし………
…」（演技依頼…主人公が聞き取れないくらいの小声）

⑪「な、何でもないです！ とにかく先輩には、お布団よりももっと、いい結婚相手がいるはずですから！ 全くもう、変なこと言い出さないでください」

⑪「それにしても、冬かあ……うう、寒さ以外にも厳しいことの多い季節です……」

⑪「いや、だって、クリスマスやバレンタインと、リア充御用達のイベントばかりじゃないですか……！ それにそもそも、寒いから人肌恋しくなる季節ですし……」

⑪「彼氏ですか？ この話の流れで梢に彼氏がいる訳ないでしょう！」



⑪「……………好きな人は、いますけれど」(演技依頼…ぼそぼそ言う感じで)

⑪「誰かって？ 言う訳ないでしょう、言う訳！ 絶対に誰にも言わないから？ そうだ

としても、先輩にだけは教えられません。内緒です、内緒！」

⑪「……そ、そう言う先輩は、もしかして彼女がいたり……？」(演技依頼…不安そうな感じで)

⑪「い、いないんですね！ まあそうですね！ 先々月聞いたときも、先月聞いたときもないって言っていましたもんね！ 梢、わかっていて聞いたところ、あります！」

⑪「そういえば、これは聞いたことなかった気がしますけど……ちなみに、好きな人は……？」

⑪「な、内緒なんですかー!? 何ですか、それくらい教えてくれたっていいじゃないですか！ さっきのお返し？ いや、梢は好きな人がいるかどうかは明かしていますので！ 公平性が全然保たれていないですよ、先輩！」

⑪「っーん、もう先輩なんて知らないです。部活動で正座しているとき、足が他の人の五倍痺れやすくなってしまうばい



いんです」

⑪ 「部活動といえば……文化祭、もう来週なんですな」

⑪ 「早いですよね。入学したときが、まるで昨日のことみたいに感じられるのに」

⑪ 「……先輩は文化祭、楽しみですか？」

⑪ 「隣のクラスが鯛焼きを売るのが一番の楽しみ……!? はあ、相変わらず先輩は和菓子が好きなんですな……もしかして茶道部に入ったのも、和菓子につられたからなのでは？」

⑪ 「わ、和菓子と結婚しようかなって……だから、どうして先輩は、家具や食べ物とばかりフラグを立ててるんですかー! いけません、そんな! 第一和菓子と結婚しても、先輩はすぐぱくつと食べちゃうでしょう! 胃の中ですよ、和菓子な奥さん!」

⑪ 「じゃあどんな結婚相手がおすすめか、ですか？」

⑪ 「そ、そうですね……先輩はちょっと抜けているところがあるので、しっかり者の奥さんなんて素敵なんじゃないで



しょうか。でも何だかんだ頼れるところもある
ので、年上や同い年より断然年下の奥さん
がお似合いですね。それとやはり先輩は茶道
に一生懸命なので、奥さんも同じく茶道を嗜
まれているとよろしいでしょう」

⑪「ね、でしょう、ぴったりでしょう！ ふふつ、梢の見立
てなら間違いありません」

⑪「……え？ 梢が文化祭を楽しみにしているかどうか、で
すか？」

⑪「勿論、楽しみですけど……でも、それと同時に、ちよつ
と不安なんです」

⑪「ほら、茶道部は、お客さんと呼んでお茶会を開くじやな
いですか」

⑪「梢……上手くできるか、心配です。沢山練習してきまし
たし、大丈夫だと思うんですが……それでもやっぱり、失敗
しちゃったらどうしようって、考えちゃいます」

⑪「ダメですね、こんなんじゃ。来年になったら、後輩さん
たちも入ってくるのに……」



⑪「……え。何か力になれないか、ですか？」

⑪「そつ、そんな、申し訳ないですよ……！
だって、梢はいつも、先輩にお世話になりっ
ぱなしですし……色々、ご迷惑もお掛けして
いると思いますし……」

⑪「……申し訳ないとしたら、文化祭で鯛焼きを一匹ご馳走
してくればそれでいい、ですか？」

⑪「ふふつ、あはは……先輩、どれだけ鯛焼きが好きなんで
すか……」

⑪「……ありがとうございます、先輩。梢、先輩のお言葉に
甘えちゃおうと思います」

⑪「そうしたら、先輩、明後日の日曜日ってお時間あったり
しますか？」

⑪「よければ、梢のおうちに来てほしいんです」

⑪「……………？ 先輩、何だか、お耳の辺りが赤くなってき
たような……」（演技依頼……不思議そうに）



⑪「……はっ！ あっ、その、違くて……！
変な意味とかでは、全然なくて！ その、稍
のおうち、茶室があるので、そこでお稽古に
付き合ってほしくて！ そ、そうなんです！
そういうことなんです、先輩！」

⑪「も、もう、勘違いしないでください、先輩のばか……！」

⑪「……………ま、まあ、先輩になら、ちよつとくらいなら勘
違いされてもよかったのかもしれないですが……」（演技依
頼…主人公が聞き取れないくらいの小声）

⑪「なっ、何でもないです！ ほら、先輩、駄見えてしまし
たよ！ さっさと行きましょう！」



Chapter・2

(SE…秋風の吹く音、たまに鳥の囀り　このChapter中継続)

(SE…主人公の足音)

(SE…主人公が立ち止まり、インターフォンを鳴らす音)

⑨『……はいっ。先輩、少しそここでお待ちいただけますか？……ありがとうございます！』(インターホン越しの声)

(SE…インターフォンが切れる音)

(SE…少ししてから、やや遠くの方にある玄関引戸の開錠音、引戸が開かれる音)

(SE…梢が主人公の方へ駆け寄ってくる音)

(SE…梢が門を開く音)

⑨「お待たせしました、先輩……！　はあ、はあ……ふふっ、急いで来たら少し息が上がっちゃいました」



⑨「無事、辿り着けたみたいでよかったです。本当に、住所を送るだけでよかったんですか？ 梢が駅まで迎えに行っても全然よかったのに」

⑨「最近の地図アプリはとても優秀？ ふふつ、まあ、それもそうですね」

⑨「え、服、ですか？」

⑨「そうなんです。ほら、文化祭では着物を着ることになるでしょう？ だから梢、おうちにあった着物を着てみたんです」

⑨「それで、その……ど、どうですか？ 着物姿の、梢は……」

⑨「制服姿を見慣れているから新鮮、ですか……そ、そんなのはわかってるんです！ 梢はもっと、何というか……ええと……『か』から始まって、『い』で終わるような、そういう感想を求めているんです！ も、もう、言わせないでください！」

⑨「カラフルで、いい……!? た、確かに、この着物には様々



な色が使われていますすけれども！ 何でそうなるんですか！ 先輩のばかつ……！」

⑨「す、すごい勢いで首を傾げている……もしかして、本当に伝わっていないんですか……!?」(演技依頼…愕然とした感じで)

⑨「わかりましたよ……はつきり言えいいんでしょう、はつきりと……」

⑨「その……梢、かわいい、ですか……？」(演技依頼…少し小声で)

⑨「……かわいい、ですか！ う、うう、嬉しいんですけれど……目を合わせながら言われると、照れちゃうといえますか……こ、こっち見ちゃだめです、先輩！ 今、梢の顔、赤くなっているかもしれないので……！」

(主人公が少し右を向く)

⑩「うう、こんなときは深呼吸です……すうう、はああ……すうう、はああ……」

⑩「……よし、多分もう大丈夫です！ それじゃあ、行きま



しよう、先輩……！」

(SE…主人公が門の先に入る足音)

(SE…梢が門を閉める音)

(SE…主人公と梢の足音)

⑮ 「……広いね、ですか？ はい、実はそうなんです……梢のおうち、自分で言うのも何ですけど、由緒ある家なんです」

⑮ 「だから、お庭も広くて……梢、たまに一人でお散歩しているんです」

⑮ 「羨ましい？ そうですか……あつ、そうしたら、よければその、一緒にちよっとお散歩しませんか？ ほら、いきなり部活動よりも、その方が一息つけるかなあって……！」

⑮ 「……ふふつ、そうしましょう！」

⑮ 「やったあ……先輩とお庭デートじゃないですか……」(演技依頼…主人公が聞き取れないくらいの小声)



⑮ 「べ、別に、何でもないですよ？ それじゃあ、梢が案内しますね」

⑮ 「今の季節は、シクラメンがとっても綺麗なんです。ぜひ見ていってください、先輩」

⑮ 「先輩は、シクラメンの花言葉、知っていますか？」

⑮ 『遠慮』『内気』『はにかみ』といったものが一般的ですが、実は色によって意味が変わったりもするんですよ」

⑮ 「例えば赤色のシクラメンには、『嫉妬』という花言葉もあるんです」

⑮ 「先輩は、誰かに嫉妬したりするときってありますか？」

⑮ 「自分よりも茶道が上手い人を見ると、嫉妬しちゃうんですね……ふふっ、先輩は相変わらず真面目ですね。普段は茶目っ気もあるのに、そういうギャップのあるところ、素敵です」

⑮ 「梢ですか？ そうですね、確かに梢も茶道に関して嫉妬の気持ちを抱いたりしますが、それよりも、もっと、せんば……」



⑮ 「……やっぱり、何でもないです」

⑮ 「お、教えませんか！ 自分で考えたらどうですか！ ……みたらし団子奢るから？ あのですね、先輩……誰もが先輩のように、和菓子でつられると思ったたら大間違いですよ？」

⑮ 「んー、もう、しょうがないですね……そうしたら、ちよつと耳貸してください」

⑦ 「ありがとうございます。実は、ですね……」(演技依頼……ささやき)

(演技依頼……耳に息を吹きかける)

⑮ 「……あははっ、先輩、びつくりしていますね？ 梢のいたずら、大成功です。簡単に教えてもらえると思ったたら大間違いなんですから」

⑮ 「それにしても、思ったより反応がよくて、何だか癖になっちゃいそうです。ふふっ」

⑮ 「……あ、ほら、これです、シクラメン！ ね、すごく綺麗でしょう？ ……ふふっ、そう言ってもらえて、梢はとっても嬉しいです」



⑮ 「あ、そうだ……鯉さんも見て行ってほしいです！ こっちですよ、先輩」

（SE…水の音が段々と近付いてくる）

（SE…二人が立ち止まる音）

⑮ 「ほら、鯉さんたちです！ オレンジ色と白色の模様が華やかで綺麗でしょう？」

⑮ 「かわいい、ですか……梢も確かに、そう思います」

⑮ 「ちつ、ちなみに！」（演技依頼…少し大きな声で）

（主人公が梢の方を向く）

⑨ 「その……えっと……鯉さんと梢だったら、どちらがより、かわいいですか……？」（演技依頼…恥ずかしそうに）

⑨ 「え……こ、梢の、圧勝なんですか……!？」

⑨ 「う、ううう……そんなに真っ直ぐに見つめないでください！ ほら、鯉さん見てください、鯉さん！ 梢、今ちよつと、先輩に見せられる顔じゃないので……!」



（主人公が鯉の方を見る）

⑮ 「すうう、はああ……すうう、はああ……」

⑮ 「よし、も、もう大丈夫ですよ！ 梢の方を見て、問題ありません！」

⑨ 「……あつ」（演技依頼……何かに気付いた感じで）

⑨ 「ふふっ……先輩、頭に葉っぱが乗っていますよ？ しょうがないので、梢が取ってあげます。屈んでもらえますか？」

② 「ありがとうございます……えーつと……よし、取れました！」

② 「はっ。気付けば先輩の耳が、すごく近くにありますが……」

（演技依頼……耳に息を吹きかける）

③ 「あれ……もしかして先輩、そんなに効いていないふりをしているんですか？ ふふっ、梢はそれくらいお見通しですよ？ ……何のことだかさっぱりわからない、ですか？ ふ



うん、そうしたらもう一度、確かめてみましょうか……」(演技依頼…ささやき)

(演技依頼…耳に息を吹きかける 先程より長めに)

⑨「……ふふつ、やっぱり効いているじゃないですか！ 梢の勝ちですね」

⑨「あはは、先輩、勘ねちやいましたか？ ごめんなさい。そうしたら、そろそろお稽古の時間にしましょうか」

⑨「先輩のために、美味しいお茶菓子を買っておいたんですよ？」

⑨「あつ、機嫌が直ったみたいですね。全く、本当に和菓子好きなんですから……」(演技依頼…最後はちよつと呆れつつ、それでいて愛おしげに)



Chapter 3

(SE…主人公と梢が家の中を歩く音)

(SE…二人が立ち止まる音)

⑪「……ここが茶室ですよ、先輩」

⑪「ふふっ、びつくりしているんですか？ 確かに、おうちに茶室があるって結構珍しいですよね」

⑪「それでは早速、お稽古を始めましょうか。先輩はお客さんの立場で、梢のお点前を見ていてください。最後に「ご感想やご意見をいただければ幸いです」

⑪「あ、それと……今回は、手順とかを口にしながらやってみてもいいですか？ 勿論、本番では静かにやるんですけれど、復習の意味を込めて……！」

⑪「……よかったです。ありがとうございます、先輩」

⑪「そうしたら、茶室で待っていてくださいいね」

(SE…主人公が茶室に入る足音)



(SE…梢が襖を閉める音)

(SE…主人公が茶室に正座する音)

(SE…少しして、襖の向こうから聞こえる
梢の足音、梢が正座する音)

(SE…梢がゆつくりと襖を開く音)

⑩ (遠め) 「それでは始めますね、先輩」

(SE…梢が茶菓子の入った皿を持って立ち上がり、主人公
の元へゆつくりと歩いてくる音)

(SE…梢が主人公の前に正座して、お皿を置いて一礼する
音)

⑨ 「……あ、わかっていると思いますが、まだ食べたらだめ
ですよ？ ふふっ」

(SE…梢が立ち上がり、去っていく音)

(SE…少しして、梢が戻ってきて正座し、畳にお盆を置いてから一礼する音)



⑩（遠め）『お薄を^{うす}一服差し上げます』

（SE…梢がお盆を持って立ち上がり、ゆっくりと茶室へ入ってくる足音）

（SE…梢が正座して、お盆を置く音）

☆（⑨と⑩の間くらい、少し遠めを示す 以下同様）「お盆の次は、建水^{けんすい}を持って来なくちゃですね……」

（SE…梢が立ち上がり、去っていく音）

（SE…少しして、梢が建水を持って戻ってくる足音）

（SE…梢が正座しながら左隣に建水を置く音）

（SE…お盆を身体ごと右斜め前に移動させてから、建水を少し前に移動させる音）

☆「居住まいを、正して……」（SE…姿勢を直す音）

☆「帛紗^{ふくさ}を、捌く……」（SE…帛紗を捌く音）

☆「棗^{なつめ}を清めて……置いて……」（SE…帛紗で棗を拭いて



清め、棗をお盆の上に置く音)

☆「もう一度、帛紗を捌く……」(SE…帛紗を捌く音)

☆「茶杓ちやしゃくを清めて……置いて……」(SE…帛紗で茶杓を拭いて清め、茶杓をお盆の上に置く音)

☆「茶筌ちやせんと、茶巾ちやきんを置く……」(SE…茶碗に入っていた茶筌、茶巾を順番にお盆の上に置く音)

☆「それから、蓋を閉めて……」(SE…帛紗を持って鉄瓶の蓋を閉める音)

☆「お湯を注ぐ……」(SE…左手で鉄瓶を持ち、右手に持った帛紗で蓋を押さえながら茶碗にお湯を注ぐ音)

☆「ふう……」(SE…鉄瓶を戻し、帛紗を置く音)

☆「そうしたら、茶筌を通して……」(SE…茶筌通しをする音)

☆「茶筌を戻して……お湯を建水に……」(SE…茶筌をお盆の上に置く音、建水に茶碗のお湯を捨てる音)



☆「茶巾で、お茶碗を清めて……」(SE…
茶巾で茶碗を拭いて清める音)

☆「よし……」(SE…茶碗をおき、茶巾を
茶碗から出してお盆に置く音)

☆「……ふふっ、先輩、お待たせしました。それでは、『お
菓子をどうぞ』」

(SE…主人公が茶菓子の入った皿を少しか持ち上げ、下
ろす音)

☆「今日は先輩しかいないので、乗っているお茶菓子は全部
食べちゃってください」

(SE…主人公が懷紙を出し、茶菓子をその上に移動させて
いく音)

☆「ふふっ、喜んでもらえて嬉しいです」

☆「それでは梢は、続きを……」(SE…棗を取り、蓋を開
ける音)

☆「二杓入れて、打つ……」(SE…茶杓で茶碗に二杓茶を



入れ、茶杓を茶碗の縁で打つ音)

☆「蓋をして、置く……」(SE…棗の蓋をする音、棗と茶杓を順番に元の位置に戻す音)

☆「また、お湯を注ぐ……」(SE…左手で鉄瓶を持ち、右手に持った帛紗で蓋を押さえながら茶碗にお湯を注ぐ音)

☆「戻して……」(SE…鉄瓶を戻し、帛紗を置く音)

☆「ふう……よし、お茶を点てます」

(SE…お茶を点てる音)

☆「できました……!」(演技依頼…嬉しそうに)

☆「ええと……」(SE…茶碗を持ち、二度回し、主人公に差し出す音)

☆「……はい、どうぞ。先輩」

(SE…主人公が立ち上がり、ゆっくりと歩く音)

(SE…立ち止まった主人公が茶碗を持って、元の場所へ歩



く音)

(SE…主人公が正座して茶碗を正面に置き、お辞儀する音)

(SE…主人公が茶碗を持ち上げ、時計回りに二回ほどずらす音)

(SE…主人公がお茶を飲む音)

☆「……どうでしょうか？」(演技依頼…少し心配そうに)

☆「泡立ちが絶妙、ですか……!？」

☆「やったあ……梢、すごく嬉しいです」

(SE…主人公が飲み終えた茶碗を畳に置く音)

(SE…茶碗を数秒拝見してから、主人公が立ち上がり、ゆっくりと歩く音)

(SE…主人公が梢の元に茶碗を返す音)

⑨「ありがとうございます、先輩」(SE…茶碗を持ち、お



盆の上に置く)

(SE…主人公が元の場所へ歩き、正座する音)

☆「そうしたら、お湯を注いで……」(SE…左手で鉄瓶を持ち、右手に持った帛紗で蓋を押さえながら茶碗にお湯を注ぐ音)

☆「よし……」(SE…鉄瓶を戻し、帛紗を置く音)

☆「お湯は、建水に……」(SE…建水に茶碗のお湯を捨てる音)

☆「お茶碗を、戻して……」(SE…茶碗をお盆に戻す音)

☆「『おしまいいたします』」(SE…梢が一礼する音)

☆「もう一度、お湯を注いで……」(SE…左手で鉄瓶を持ち、右手に持った帛紗で蓋を押さえながら茶碗にお湯を注ぐ音)

☆「ふう……」(SE…鉄瓶を戻し、帛紗を置く音)

☆「茶筌を、通して……」(SE…おしまいの茶筌通しをす



る音)

☆「茶筴を戻してから……お湯を建水に……」(SE…茶筴をお盆の上に置く音、建水に茶碗のお湯を捨てる音)

☆「茶巾を仕舞って……茶碗を置いて……茶筴を仕舞って……」(SE…茶巾を茶碗に仕舞い、茶碗をお盆に戻し、茶筴を茶碗に仕舞う音)

☆「茶杓を取って……建水を下げて……帛紗を取る……」(SE…右手で茶杓を持つ音、左手で建水を少し後ろに下げる音、帛紗を持つ音)

☆「帛紗を捌いたら……」(SE…帛紗を打ち返し、捌く音)

☆「茶杓を拭いて……置く……」(SE…茶杓を拭き、茶碗の上に置く音)

☆「棗を、戻して……」(SE…棗を最初の位置に戻す音)

☆「帛紗を、払う……」(SE…建水の上で帛紗を払う音)

☆「釜蓋^{かまふた}を切ったら、帛紗を捌いて……」(SE…帛紗で釜



蓋を切る音、帛紗を捌く音)

☆「帛紗を、腰に……」(SE…帛紗を腰に付ける音)

☆「お盆を、正面に置いて……」(SE…お盆を持ち、正面に置く音)

☆「ふう……そろそろ、終わりが見えてきましたね」

☆「まずは、建水を持って行きます」(SE…建水を持って立ち上がり、去っていく音)

(SE…少しして、梢が戻ってきて、お盆の正面に座る音)

☆「そうしたら、お盆を持って行きますね……」(SE…お盆を持って立ち上がり、歩く音)

(SE…梢が襖の前に座り、お盆を下ろす音)

⑩ (遠め)『失礼いたしました』(SE…一礼する音)

(SE…梢がゆつくりと襖を閉める音)



(SE:数秒立つてから、梢が少し勢いよく襖を開ける音)

⑩ (遠め)「お疲れ様でした、先輩!」(SE
:梢が主人公の元へ近付いてくる足音)

(SE:主人公が立ち上がる音)

⑨ 「足、疲れちゃいましたか? ……これくらいなら余裕?
ふふっ、流石先輩です」

⑨ 「それで……梢のお点前は、どうでしたか……?」

⑨ 「……ばつちりだと思う? ほ、本当ですか! よかった
です……!」

⑨ 「昨日も練習しておいた甲斐がありました。ふふっ」

⑨ 「それで、その、先輩……頑張った梢に、何かご褒美があつ
たりしないんですか……?」

⑨ 「後で三色団子を奢る……!? せ、先輩は、団子を奢るこ
としか能がないんですか!? い、いや、嬉しいですかられど
も!」



⑨「その……じゃあ、それに加えて……」

⑨「梢の頭、なでなでしてほしいです……」

(演技依頼…少し小声で)

⑨「そんなんでいいの、って……そうですよ、そんなんでいいんです！　むしろ、そんなが、いいんですー！」

⑨「きゃっ……ふふ、えへへ……ふふ……」(SE…主人公が梢の頭を撫でる音)

⑨「……も、もう終わりなんですか？」

⑨「むう……別に？　もつと撫でてほしいとか、全く、思っていないですよ？」

⑨「ところで、先輩。ちよつと耳を貸してください」

⑦「ふふっ、ありがとうございます」

⑦「実はね……梢からも、わざわざ休日につき合ってくださいった先輩に、ご褒美があるんですよ？」(演技依頼…ささやき)



Chapter : 4

(SE…秋風の吹く音、たまに鳥の囀り)

(SE…主人公と梢の足音、立ち止まる音)

⑪ 「いい景色でしょう、先輩？」

⑪ 「梢、この縁側が大好きなんです。ここでごろんと寝転がると、とっても安らぐんですよ」

⑪ 「という訳で、早速、梢からのご褒美のお時間です！」

⑪ 「先輩は、縁側に座ってくださいね」

(SE…主人公の足音、縁側に座る音)

(SE…梢が主人公の後ろまで歩いてくる音)

⑬ 「それでは今から、梢が先輩に肩叩きと肩揉みをしてあげます」

⑬ 「ふふっ、梢の肩叩きと肩揉み、おじいちゃんとおばあちゃんに好評なんですよ？」



⑬ 「それじゃあ、楽にしてくださいね
……」

(SE…肩叩きの音〈a〉まで継続)

⑬ 「とんとんとんとん、とんとんとんとん、とんとんとんとんとんとん……」(演技依頼…一叩きにつき「とんとん」くらいのペースで)

⑬ 「どうですか、気持ちいいですか? ……ふふつ、それは何よりです」

⑬ 「とんとんとんとん、とんとんとんとん、とんとんとんとんとんとんとん……」

⑬ 「ね、梢の肩叩き、上手でしょう? ……そうでしょう、そうでしょう! 嬉しいです」

⑬ 「とんとんとんとん、とんとんとんとん、とんとんとんとんとんとんとん……」

⑬ 「力加減はちょうどいいですか? ……うんうん、それは何よりです」



⑬ 「とんとんとんとん、とんとんとんとん、
とんとんとんとん、とんとんとんとん、とん
とんとんとん……」

⑬ 「ふふっ……後ろ姿の先輩って、普段あん
まり見る機会がないので、何だか新鮮です」

⑬ 「とんとんとんとん、とんとんとんとん、とんとんとん
とん、とんとんとんとん……」

⑬ 「よしっ……これくらいでお願いします!」

〈a〉(SE…肩叩きの音 ここまで)

⑬ 「そうしたら、今度は肩揉みのお時間ですよー」

⑬ 「準備はよろしいですか、先輩?」

(SE…肩揉みの音 〈b〉まで継続)

⑬ 「よいしょ、よいしょ……先輩の肩、割と凝っている感じ
がしますね……」

⑬ 「知っていますか? ハーブティーを飲むと、肩凝りに効



果があるらしいんです。梢もたまに飲むんですが、香りもよくておすすめですよ」

⑬ 「まあ梢たちは、お抹茶を飲む機会の方がずっと多そうですね。ふふっ」

⑬ 「ちなみに先輩は、どんな飲み物が好きなんですか？」

⑬ 「……お汁粉？ 何というか、流石先輩です。期待を全く裏切らない回答でした、ふふっ」

⑬ 「梢ですか？ 梢は、果実のジュースが好きです。林檎とか、蜜柑とか、葡萄とか……」

⑬ 「ここだけの話、お抹茶は梢にはちよつと苦かったりします。でも、お茶菓子との相性は抜群ですよね」

⑬ 「先輩って、ブラックコーヒーは飲めますか？」

⑬ 「飲めるけれど、甘い飲み物の方が好き……ふふっ、すごわかります！ 先輩と意見が一致して、梢は嬉しいです」

⑬ 「コーヒーを飲むときは、お砂糖とミルクをたっぷり入れるのが梢流です。そうすると、まろやかな味わいになって素



晴らしいんですよ？」

⑬「……ところで、先輩の肩、結構ほぐれてきた気がしますせんか？ 流石梢です……」

⑬「自分の肩も、自分で後ろから揉めたらいいのに。手を後ろに伸ばして揉んでも、何だか微妙な心地なんですよね。むう」

⑬「自分もう一人いれば、肩揉みしてもらえるのになー……でも、お父さんもお母さんもびつくりしちゃいますよね。想像すると面白いです、ふふっ」

⑬「……あ、お父さんとお母さんですか？ 今日是一日二人でお出掛けみたいですよ。なので、今先輩とは二人きりという訳です」

⑥「……ふふっ、ときどきしますか、先輩？」（演技依頼……ささやき）

⑬「勿論ときどきする、ですか……!? 余りにも率直な感想が返ってきて、梢はびっくりしています！」

⑥「ちなみに、梢も、勿論ときどきします……」（演技依頼



…ささやき)

⑬「……………」

⑬「はっ、はい、肩揉みおしまいです！」

へb〈(SE…肩揉みの音 ここまで)

⑬「ふう……結構、腕が疲れました」

⑬「どうでしたか、先輩……？」

⑬「肩が軽くなった気がする、ですか？ ふふっ、それは何よりです！」

⑥「……ちなみに、ご褒美はまだあるんですよ？」(演技依頼…ささやき)



Chapter 5

(SE…秋風の吹く音、たまに鳥の囀り)

(SE…梢が、段々と主人公に近付いてくる足音)

⑨ 「お待たせしました、先輩」

⑨ 「何をしていたのか？ ふふ、そう遠くないうちにわかりますよ」

⑨ 「そうしたら、よいしょ、と……」(SE…梢が主人公の側で正座する音)

⑨ (位置低め) 「来てください、先輩。梢が、先輩に膝枕してあげます」

⑨ (位置低め) 「どうしてか？ ふふ、それは膝枕されてからのお楽しみです」

(SE…主人公が寝転ぶ音)

⑨ 「後頭部を、太ももに乗せてくれますか……はい、ばっち



りです！」

⑨「それじゃあ、先輩。少し、目を瞑っていただきますね」

(SE:両耳をマッサージする音　へへまで継続)

⑨「……ふふっ、びっくりしましたか？」

⑨「この前、お耳のマッサージには癒し効果がある、って情報を目にしたんです」

⑨「なので、先輩にやってあげようと思って……どうですか、癒されますか？」

⑨「……ふふ、それは何よりです」

⑨「ふにふに、ふにふに……」

⑨「そういえば先輩、ご存知ですか？　お耳には、沢山癒される神経が通っているらしいですよ」

⑨「先輩は頑張り屋さんですから、今はいっぱい、癒されてくださいね」



⑨「耳たぶも触っちゃいます。ふにふに」

⑨「先輩の耳たぶ、柔らかくて触り心地がいいです。ふふ」

〈c〉(SE…両耳をマッサージする音 ここまで)

⑨「それでは、お耳のマッサージはおしまいです」

⑨「そうしたら、もう一つ、お耳の癒しがあるんです」

(SE…梢が懷から梵天付きの耳かきを取り出す音)

⑨「じゃーん、これを見てください！ 先輩、何だかわかりますか？」

⑨「……団子の串!? そんな訳ないでしょう！ 逆にそうだとしたら、梢、食べ終わった団子の串を持ってきて先輩を悔しがらせる嫌な人になっちゃいますよ!？」

⑨「全くもう……正解は、梵天付きの耳かきです!」

⑨「実はさつき、これを取りに行っていたんです」



⑨「という訳で、今から梢が先輩に耳かきをしてあげます。ふふっ、素敵なご褒美でしょう？」

⑨「新品なので、衛生面もばっちりなんです」

⑨「……何で新品の梵天耳かきを持つているのか？ そんなの、いつか先輩にやってあげたかつ……何でもありません。ほ、本当に、何でもありませんから！」

⑨「細かいことは気にしないでいいんです、全く」

(SE…梢が主人公の側で正座する音)

⑨(位置低め)「そうしたら、右耳が見えるように、梢の太ももに頭を乗せてくれますか？」

(SE…主人公が寝転ぶ音)

⑮「……うん、いい感じですよ。そうしたら、早速耳かきの時間です。いきますよー……」

(SE…右耳の耳かきの音 〈d〉まで継続)



⑦「かりかり、かりかり……どうですか、痛くないですか？ ……気持ちいい？ ふふつ、それは何よりです」

⑦「かりかり……かりかり………」

⑦「え、もっと奥の方もやってほしいんですか……？ わかりました、そうしたらもうちよつと奥に入れてみますね………」

⑦「大丈夫ですか、先輩。痛くないですか？ ……とても気持ちいい？ それはよかったです」

⑦「かりかり……かりかり……かりかり………」

⑦「ふふ、何だか眠たそうですね、先輩？ そんなにリラックスしてもらえて、梢は嬉しいです」

⑦「かりかり……かりかり………」

⑦「それにしても、先輩のお耳をこんなに近くで見られるなんて、珍しい機会ですよね」

⑦「茶道部の皆さんも、きっと見たことがないはずですよ。梢



だけです、ふふっ」

⑦「かりかり……………かりかり……………かりかり……………」

⑦「外側の辺りもやっておきましょう。意外とここに汚れが潜んでいるかもしれませんし……」

⑦「かりかり……………かりかり……………」

⑦「……………よし、しっかりお掃除できました！」

〈d〉(SE…右耳の耳かきの音　ここまで)

⑮「そうしたら、梵天の部分で仕上げしますね」

(SE…右耳の梵天耳かきの音　〈e〉まで継続)

⑦「どうですか？　ふわふわで気持ちいいでしょう？　……ふふっ、何よりです」

⑦「ふわふわ……………ふわふわ……………」

⑦「そういえば、梢はいつも綿棒で耳掃除しているんです。



なので、梵天付きの耳かきがどんな感じか、ちよつと気になります」

⑦ 「先輩の反応を見る感じ、期待が持てますね。ふふっ」

⑦ 「……よし、ばっちりです！」

〈e〉（SE…右耳の梵天耳かきの音　ここまで）

⑮ 「そうしたら、先輩。今度は左耳が見えるように、身体の向きを変えていただけると助かります」

（SE…主人公が体勢を変える音）

⑪ 「はい、ありがとうございます！ それでは、左耳、やっていきますね」

（SE…左耳の耳かきの音　〈f〉まで継続）

③ 「かりかり、かりかり……先輩、いい感じですか？ ……よかったです！」

③ 「実は梢、人に耳かきしてあげるのって初めてな気がする



んです……初めてでこれだけ上手にできると
いうことは、もしかしたら才能があるのかも
しれません。ふふっ」

③ 「かりかり……………かりかり……………」

③ 「また、奥の方をやってほしいんですか？　好きですね、
先輩……………」

③ 「……………痛くないですか？　……………それなら何よりです」

③ 「かりかり……………かりかり……………かりかり……………」

③ 「ふふっ、先輩、すごく眠たそうです。全然、眠ってしまった
ても大丈夫ですよ？　おやすみなさい、先輩」

③ 「かりかり……………かりかり……………かりかり……………か
りかり……………」

③ 「さっきと同じように、外側の辺りもやっておかなきゃで
すね」

③ 「かりかり……………かりかり……………」



③「折角なので、もう一回奥の方もやってあげましょう」

③「かりかり……………かりかり……………かりかり……………」

③「……………うんうん、いい感じですよ！」

〈f〉(SE…左耳の耳かきの音　ここまで)

⑪「こちらでも、梵天の部分で仕上げていきますよ……………」

(SE…左耳の梵天耳かきの音　〈g〉まで継続)

③「ふわふわ……………ふわふわ……………ふわふわ……………」

③「そういえば、梵天付きの耳かきって、何だかタンポポの綿毛に似ていますよね」

③「昔、綿毛をふうってして、遊んだなあ……………」

③「何だか懐かしくなっちゃいました」



③「……って、あれ？ 先輩、もしかして、本当に眠っちゃいましたか……？」

〈g〉（SE…左耳の梵天耳かきの音 ここまで）

⑪「もしもし？ 先輩？」

③「ほっぺたを、つんつん……」（SE…梢が主人公の頬をつつく音）

⑪「ほ、本当に眠っちゃったみたいです……！」

⑪「余程、梢の耳かきが気持ちよかったんでしょう。ふふつ、やっぱり梢、耳かきの才能があるみたいですね」

⑪「それにしても……先輩の寝顔、かっこいいなあ」

⑪「……眠っているということは、何を言っても大丈夫ってことですよね？」

⑪「そうしたら、ちょっと、練習しておこうかな……」

③「……ずっと前から、先輩のことが好きでした。梢と、付



き合ってください」(演技依頼…ささやき)

⑪ 「うーん……これだとちよつと、正統派すぎますかね？ そうしたら」

③ 「どんな和菓子よりも、梢が一番美味しいですよ？」(演技依頼…ささやき)

⑪ 「だ、だめです。何だか若干、えっちになっちゃいました。そうしたら」

③ 「梢を、先輩の奥さんにしてくれませんか？」(演技依頼…ささやき)

⑪ 「うーん……ちよつと、段階を飛ばしすぎているような気がしますね」

⑪ 「……あれ？」

⑪ 「先輩の耳が、どんどん、赤くなっていますね……」

⑪ 「……も、もしかして、起きています、先輩!？」

⑪ 「寝ているよって……寝ている人は寝ているよって言えま



せん！」

⑪ 「い、いつから起きていたんですか!？」

⑪ 「……ずっと起きていた？　いたずら心が働いて、狸寝入りしていた？」

⑪ 「あ……あわわわわ……!」



Chapter・6

（SE…秋風の吹く音、たまに鳥の囀り）

（主人公と梢は座って向かい合っている）

⑨ 「あ、あの……さっきの告白は、全部、冗談で！」

⑨ 「え……何でそんなに、残念そうな顔、するんですか……？」

⑨ 「……………」

⑨ 「……え」

⑨ 「先輩、梢のことが、好き、なんですか……!？」

⑨ 「そつ、それは、後輩として、とかいうオチですか!？」

⑨ 「……一人の、女性として!？」

⑨ 「……何しているの、って……決まっているじゃないですか。自分のほつぺたをつねって、これが夢でないかどうかを確かめているんです」



⑨ 「いたた……」

⑨ 「痛いということは……現実……!」

⑨ 「うう、まだ、信じられません……心臓が、
ばくばくしています……」

⑨ 「あ、あの。聞いてもいいですか？」

⑨ 「梢のどこを、好きになったんですか……？」

⑨ 「………あつ、あわわ……そ、そんなに一気に言われる
と、頭が追いつかないです! か、かわいいって、沢山言わ
ないでください! 恥ずかしいです、先輩……!」

⑨ 「もう……先輩の、ばか……」

⑨ 「え? 梢が、先輩のどこを好きになったか、ですか？」

⑨ 「……端的に言うなら、全部です」

⑨ 「もっと、長々と言うなら……」

⑨ 「梢、中学三年生の頃、受験の息抜きに、第一志望の高校



の文化祭に行っただんです」

⑨「その頃、梢、自分の家柄とかを重荷に感じていて……幼いときから習っていた茶道も、その負の感情に巻き込まれてしまっていたんです」

⑨「でも、茶道部の活動は結局気になってしまって、お茶会に行っただんです」

⑨「そのとき、先輩がいたんですよ」

⑨「先輩の眼差しはとても真剣で、……それでいて、楽しそうで」

⑨「そんな先輩のお点前を見ていたら、梢、自分が茶道を楽しんでいた記憶を、いっぱい思い出したんです」

⑨「大袈裟な言い方かもしれませんが、何だか救われてしまったんです」

⑨「そうして、無事受験が終わり……梢は、先輩と再会しました」



⑨ 「先輩は想像していたよりもずっと、面白い人で」

⑨ 「それでいて、やっぱり茶道に真っ直ぐで」

⑨ 「……気付いたら、恋していました」

⑨ 「……何だか、恥ずかしいです。うう……」

⑨ 「と、取り敢えず、縁側に並んで座りませんか？」

(SE…主人公と梢が立ち上がり、歩く音)

(SE…二人が縁側に腰を下ろす音)

⑮ 「ふう……」

⑮ 「ええと……つまり、梢と先輩はもう、恋人同士ということですか……？」

⑮ 「そ、そうですね……不束者ですが、よろしく願います……」

⑮ 「……………」(主人公と梢が若干お互いの方を見ている)



⑬「……ちゅ、ちゅー」

⑭「何をしているのか、って……き、決まっているじゃないですか！　ちゅーを、おねだりしているんです！　言わせないでください、もう、先輩のば……」

①「……………っ」(SE…リップ音)

⑯「……あうう……」

⑮「……は、恥ずかしいので、今日のちゅーはおしまいです！」
(梢が顔を背ける)

⑮「うう……何だか大量のエネルギーを消費したのか、眠くなってきたやいました……」

⑮「寝てて、いいんですか……？」

⑮「そうしたら、お言葉に甘えます……肩、お借りしますね」

⑧「それじゃあ、おやすみなさい……」

⑧「……あ、あの」



⑧「……梢に、おやすみなさいのハグ、してくれませんか？」

(SE…ハグの音)

⑧「……えへへっ」

⑧「先輩の身体、あったかいです……」

⑧「苦手な寒い冬も、先輩とだったら、乗り越えられるかもしれません」

(SE…ハグが終わる音)

⑧「ありがとうございます、先輩」

⑧「……大好き、です」(演技依頼…小声、恥ずかしそうな感じで)

⑧「そうしたら、今度こそ、おやすみなさい……」

⑧「……………」

⑧「……………すう、すう……………すう、すう……………」(演



技依頼…寝息 一分ほど

⑧「むにゃ……先輩、また……和菓子ばかり買って……」(演技依頼…寝言)

⑧「……………すう、すう……………すう、すう……………」(演技依頼…寝息 一分ほど)

⑧「クリスマスは……和菓子じゃなくて……ケーキでしょう……むにゃ」(演技依頼…寝言)

⑧「……………すう、すう……………すう、すう……………」(演技依頼…寝息 一分ほど)

⑧「……………ふふっ……先輩、大好きです……………」(演技依頼…寝言)

⑧「……………すう、すう……………すう、すう……………」(演技依頼…寝息 一分ほど)

